



医学をきわめる

— はなおかせいしゅう
華岡青洲 —

華岡青洲は、江戸時代の開業医であり、世界で初めて、みずから開発した麻酔薬ますいやくを用いて、全身麻酔による乳がん手術を成功させた。西洋にさきがけるこの偉業は、日本の中でも長崎や京都等の医学の中心地でない紀州（和歌山県）で達成された。

青洲は、今から二百五十年あまり前に、現在の紀の川市にしのみやま西野山で生まれた。幼いころより、医者である父から学問や医学の手ほどきを受けた。青洲は、父のもとに治療ちりょうに来る患者のようすを見て、

（立派な医者になりたい。難病を治すことができる医者になろう。）
と、心に誓ちかった。

その思いを胸に、青洲は京都で当時の最新の医学を学んだ。三年後に帰郷して医業を継ぎ、学んだ成果を生かして患者の治療に努めた。手術費用や薬代を支払えない患者にも治療を行ったので、あたたかく思いやりのある医者として知られ、患者は絶えなかった。青洲は多忙な診療しんりょうのかたわら、医学や薬学の研究にも没頭した。

（他の医者が治せない病気を治すのが自分の使命だ。最大の難病である乳がんを治すには、痛みを感じさせずに手術ができる麻酔薬をつくる必要がある。）

と考え、麻酔薬の開発に一心に取り組んだ。薬草を活用して、さまざまな工夫を重ね、小動物で実験を繰り返した。

(動物に効いても、はたして人間に通用するだろうか……。)

青洲の不安を妻と母は感じとって、

「ぜひ私たちを使って、麻酔薬を試してください。」

と、申し出た。

二人の心あたたまる覚悟に青洲は支えられた。妻は、母よりも服用の量や実験の回数も多く、その副作用のため両目の視力を失ってしまった。しかし、夫の成功を夢見て、命も惜しまない気持ちを持ち続けた。妻と母の涙ぐましい献身的な協力を得て、二十余年の苦労の後、ついに悲願の麻酔薬「通仙散」を発明した。

当時、女性の乳房は急所であるから、切れば命を失うという言い伝えがあった。そんな折、近くに住む農婦が暴れた牛に乳房をえぐりとられたが、青洲の入念な処置で、一命をとりとめた。この体験から、青洲は言い伝えに迷わず、乳がん手術のできる時期を待った。ある日、老婦人が奈良からやって来て、青洲に強く願ひ出た。

「何人かの先生にみていただきましたが、乳がんということで治療していただけませんでした。青洲先生の評判を耳にして、わらにもすがる思いでお訪ねしました。どうせ助からない命であるとあきらめていますが、先生の新しい治療法をぜひ私に試してください。」

青洲は心を動かされ、手術を決意した。万全を期すため、老婦人の風邪等を治して体調のよい時を見はからった。「通仙散」を与え、麻酔が効いている間に、自ら考案した手術器具で乳がんを摘出して、手術を無事に終えた。老婦人は大変喜び、しばらく静養して退院した。こうして、青洲は全身麻酔による乳がん摘出にみごとに成功した。

その後、青洲による乳がんの治療は百数十例にのぼった。さらに、麻酔により、青洲は、現在の外科、整形外科、泌尿器科、耳鼻科、眼科、産婦人科等、幅広い領域の治療を行った。

乳がん等の難病の手術や治療を成功させた青洲の名声は全国に知れわたり、治療や医学を求めて、各地から患者や門人（医者・医学生）が殺到した。寒村であった西野山は、一躍日本医学の中心地となった。青洲は医塾「春林軒」で患者の治療とともに、門人の育成に尽くした。大阪の中之島（現在の大阪市）に開いた分塾でも青洲の弟がその思いを受け継いだ。二つの塾を合わせた門人の数はじつに二千人をこえた。

青洲は、医塾を卒業して郷里に帰る門人に、自作・自筆の掛軸を手渡して、自らの医者としての心構えを説いた。





竹屋 簫然 烏雀 喧
ちくおくししょうぜん、うじゃくかまびすし
風光 自適 臥寒 村
ふうこうおのずから、かんそんにがすにてきす
唯思 起死 回生 術
ただおもう、きしかいせいじゆつ
何望 軽裘 肥馬 門
なんぞ、けいきゅうひばのもんをのぞまん

(意味) 私の住まいは、このような田舎にあり、まわりにはカラスやスズメがいつも鳴いている。この地の自然豊かな環境は私に適している。そんな中、私が日々ひたすら思っていることは、難病を治す医学をきわめたいということだけである。軽くて上等な衣服を身につけたいとか、りっぱな馬に乗るなどのぜいたくや出世を望まない。

青洲が郷里に帰る門人に手渡した掛軸

青洲の快挙を聞きつけた紀州藩主の徳川治宝は、青洲に侍医とくがわはるとみ（藩主を治療する医者）になるよう強く求めた。青洲は、この求めを何年も辞退したが、ついに断りきれずに侍医についた。侍医になると、和歌山城下に住まなければならなかったが、ひと月のうちの半分は西野山に住むことを申し出て、特に許された。晩年には、侍医として最高の位に推おされて紀州藩の特別な待遇を受けたが、あくまでもおごらず、つましい生活を心がけた。

時に、藩主から楽しみについて問われることがあったが、

「何もございませぬ。しいて申しあげらるなら、人助けをするのが私の望みであり、一番の楽しみなのです。」
と、きっぱりと答えた。

青洲は、アメリカ合衆国シカゴ市にある国際外科学会栄誉会館で、世界の外科医学に尽くした偉人として今もたたえられている。



春林軒

(参考文献)

- ・『医聖 華岡青洲』森慶三・市原硬・竹林弘（医聖華岡青洲先生顕彰会）
- ・『華岡青洲先生 その業績とひととなり』上山英明（医聖華岡青洲顕彰会）

(写真提供)

- ・華岡梓／医聖華岡青洲顕彰会
- ・一般財団法人青洲の里／医聖華岡青洲顕彰会